フレイザードの弟として活躍する

リーグロード

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
気がつけばフレイザードの弟という立場に転生していた!?
最強の魔族になるために、今日もオリ主は修業する。
いつからオリ主は正義の味方だと勘違いしていた？化け物？違う！俺は魔族だ!!!

目次

目覚めた戦士 ―― 1
魔界侵略作戦決行中！ ―― 24

目覚めた戦士

俺は……、一体どうなったんだ？

最後に覚えているのは、仕事の帰りに上司の不満をこぼしながら酒を飲んで一人夜道を歩いていたところまでしか……。

これ以上は何も思い出せない。今は体が酷く軽い。まるで水の中を漂っているようだ。けれど、呼吸はしっかりとできる。

そのままボーっとこの感覚に身を置いていると、俺の耳に誰かの声が聞こえてきた。

「ふむ、禁呪法で作り上げたフレイザードが上手く動いているからと気まぐれで作り上げてみたが、こっちも問題はなさそうだな」

「はい。呼吸、脈拍、いづれも問題はありません。このまま時が経てば自ずと目を覚ますでしょうハドラー様」

「ふふふ、いいぞ！　既に六大軍団長の席は全て埋まっているため軍団長にはできんが、それ以外の席を用意するとしよう。これでこやつも何らかの成果を上げれたのであれば我が地位も安泰だ！」

今聞こえてきた会話の中に聞き捨てならない単語が幾つか聞こえてきた。フレイ

ザード、ハドラー、六大軍団長の3つ。
　俺はこの名と地位を知っている。高校生の頃に読んだ漫画でダイの大冒険という世界で敵にフレイザードやハドラーといったボスがいて、そのボスが六大軍団長の地位に立っている。
　今聞いた会話では、どうやらハドラーがフレイザードを作り上げたのがうまくいったから、他にも禁呪法で生み出して更に己の地位を安定させようと画策しているのだろう。
　多分その新しく禁呪法で作り出したのは俺のことだろう。
　ここまでくれば大抵の想像はつく、何らかの原因で俺は異世界転生してダイの世界へと来てしまった。そして、俺はハドラーから禁呪法によって何らかの魔物に生まれ変わったのだろう。
　ゴボボボボッ!!!
「っ!!!」
　突然のカプセルの突然の変化にハドラーとそのお付きのモンスターは驚きをあらわにする。
　目の前の眠る者がゆっくりと目を見開いてこちらを見つめてくる。その目には生まれたばかりの者とは思えない知性と警戒が垣間見え、ハドラーは無意識に笑みを浮かべ

る。

（こやつ、生まれたばかりの癖になんという目をしておる。これは、もしかするとフレイザード以上の戦力になるかもしれん）

ただの保険程度に考えていたものが、目を覚ましてみればとんだ掘り出し物。これほどの眼光を秘めるものがただ者であるはずがない。

もし、フレイザードが先ではなく同時に生まれたとしたら、きっとワシはこやつを六大軍団長の席に座らせてたであろう。

「ハ、ハドラー様！」

「ふん、そう取り乱すな。ただ目を覚ましただけだ。ふふ、よく聞け！　オレは貴様を作り出した生みの親とも言える魔軍司令ハドラーである。これから貴様にはオレの元で働いてもらう。よいな？」

俺はその返答とばかりに、俺を閉じ込めているカプセルのガラスに手をかざし、手の握力でガラスにヒビを入れる。そのままヒビが入った場所を拳で破壊し、中の培養液が外に溢れ出る。

そのまま俺も壊れて穴が開いた場所から外に出る。

「了解しました。我が父ハドラー様。それで、ひとまずこの俺の名前はありますか？名無しだとこちらとしても困るのですが？」

「ふふふ、無論貴様の名は既に考えてある。フレイザードの後継として作り上げた故に、貴様の名はイレイザーと名付ける！」

「ふむ、イレイザーですか。なんとも陳腐ですが……。まあ、仮にも親であるハドラー様の名づけを否定しては可哀想ですし、ひとまずはイレイザーと名乗りましょうか」

俺の言葉にハドラーは若干の青筋を立ててながらも堪えて話を続ける。

「そ、そうか。納得してくれたのならば幸いだ。おい！　今すぐこやつの服を持って来い。このままではバーン様にお披露目することもできん！」

「はっ！　かしこまりました」

お付きのモンスターは命令されると、すぐさま部屋を飛び出して俺の服を取りに行く。

その間にハドラーから様々なことを聞かされた。バーン様のことやら六大軍団長のことなどを教えてもらい、この俺の種族も聞かされた。

フレイザードは爆弾岩と同じ岩石生命体だが、俺はバーン様に抵抗した魔族の死体を使って作り上げたアンデット族に分類されるようだ。

ちなみに、鏡が部屋の隅に置いてあったので覗いてみると、俺の容姿はドラゴンボールの未来トランクスの黒髪バージョンといったところだ。

アンデットというには腐ったような箇所もなく、普通に生きている魔族のようにしか

見えない。

とはいえ、アンデットということはマァムの閃華裂光拳が効かないということ、あの北斗神拳モドキのような一撃必殺技を無効果できるというのはありがたいことだ。

やがて、お付きのモンスターが俺の服を持って来て、俺は素直にそれに着替える。

そのまま、案内される形で魔王軍の幹部である六大軍団長が集まる大広間に足を踏み入れた。

その瞬間、その場にいる6人から様々な視線が俺に集中する。警戒する者、利用できるか探る者、興味本位程度の者、気に入らないといった者、感情が読み取れない者、強いのかと疑う者、などといった様々な視線をバラン、ザボエラ、ヒュンケル、フレイザード、ミストバーン、クロコダインっといった順に向けてくる。

「皆の者、こやつがオレが新たに作り出したイレイザーである。既に六大軍団長の座は全て埋まっているためまだこやつの所属は決まっておらんが、それなりの役職をあてがおうと考えておる」

そうハドラーが告げると、炎と氷でできた魔物であるフレイザードが一歩前に出てその言葉に納得できないと叫ぶ。

「おいおい、ハドラー様よ！　いくらこの俺様を作り出したあんたが作った奴とはいえそれはあまりにも贔屓してんじゃねぇか？　ここにいるのはそれぞれ何らかの実力を

示した奴らが集ってる。生まれたばかりの赤ん坊にそんな好待遇をしていいもんかねぇ？　それも、そいつは俺様の予備の保険なんだろ？　多少の実力はあってもいざ戦場で使いものになるのか不安だね!?」

「フレイザードよ、貴様の言いたいことも分かるが……、ぬ？　おいイレイザー!?」

俺は目の前に立つハドラーを押しのけて前に出る。

「ならば今ここで実際に戦ってみせようか？　フレイザード兄さん?」

フレイザードの挑発に、俺はお返しとばかりに指をクイクイと動かして挑発し返す。

俺は喧嘩を売られたとしても買うような人間ではなかった筈だ。これも恐らく今の俺を作り出したハドラーの性格が表に出ているのだろう。

「面白れぇ！　ならお前の力を見せてみな！　フィンガー・フレア・ボム」

フレイザードの炎の手から5連発のメラゾーマが放たれる。

（思ったよりも遅いな。確かにスピードはあるかもしれんが、精々が一般の高校球児のストレートくらいの速さといったところか）

真っ直ぐ一直線に向かって来るフィンガーフレアボムから横に数歩移動して避けると、余裕の笑みを浮かべてフレイザードを挑発する。

「どうした？　あまりにもノロ過ぎて歩いて避けてしまったよ」

「な、なぁにぃ!!!　よくもほざきやがったな！　今のはただの様子見だ。それを避けた

程度で勝った気でいるんじゃねぇ！」

俺の挑発に簡単に引っかかったフレイザードは、鬼の形相を浮かべて走り出してきた。そのまま走って勢いのついたままフレイザードは炎の体で出来た方の拳を握って殴りかかってくる。

それに対して、俺は避ける素振りも見せずにただその場で突っ立っている。

「逃げても無駄だと理解したか!?　ならば、ここで死ねぇ!!!」

もはやただの実力の確認など忘れて殺しあいに発展しているが、この場にいる誰もが止めようとしない。

それも当然だろう。ここに集っているのは悪の頂点である大魔王の配下である。例え仲間といえど自身の利益にならない者がどうなろうと知ったことではない。

ましてや、同じ六大軍団長とはいえ手柄を奪い合う潜在的敵という認識である。逆にもっとやれとザボエラ辺りは心の中で応援していることだろう。

フレイザードの拳が顔面に当たる直前に、棒立ち状態だったイレイザーが右手に力を込めてフレイザードを上回る速さでカウンターを放ち、フレイザードの腹に強烈な一撃が決まる。

「ぐっ……はぁ!?」

自身の攻撃が決まったと確信した瞬間に、目にも止まらない一撃を腹に喰らったフレ

イザードは困惑の表情で一歩二歩と後ろに後ずさる。
　この場にいた者もハドラー以外はまさかのイレイザーの反撃に目を見開いて驚愕の表情を浮かべる。
（やはり、このオレの目に狂いはなかった。目覚めたばかりとはいえ、こと強さにおいてはイレイザーはフレイザードの上をいっている、だが、奴ではフレイザードに負けることはなくとも勝つことはできまい）
　ハドラーの想像は当たっていた。困惑から正気に戻ったフレイザードは近接戦闘では勝ち目が薄いと判断し、中距離遠距離戦法に切り替えを図る。
　大体の者はフレイザードは残虐かつ粗暴な輩という認識しかないが、それはフレイザードの持つ側面でしかなく、もう一つの氷のような冷静さとその場に応じた機転も持ち合わせる戦術家としての一面もある。
　灼熱の炎と凍える吹雪の連続攻撃でイレイザーを追い詰めようとするも、イレイザーはフレイザードが攻撃する直前の口の動きで、いつどこに向かって攻撃を仕掛けてくるのかを予測しながら動いているので、攻撃がまったくといっていいほど当たらない。
　逆に、イレイザーはその肉体スペックを存分に生かして視界を塞ぐブレス攻撃をした瞬間に、猛スピードでフレイザードの背に回り込み強烈な蹴りを無防備な背中に叩き込む。

「グエアア!!」

無様に吹き飛ばされ鬼岩城の壁にぶつかってメリ込むフレイザードを見ながら、イレイザーはグーパーグーパーと前世の肉体とまるで違う感覚にようやく慣れてきたのか、闘いの最中だというのにその場でシャドーボクシングを始めだす。

しかも、一発一発が音速の領域に入っており、風も入ってこない鬼岩城内に嵐のような風が吹きすさぶ。

「この肉体は俺の想像以上のスペックだな……」

拳を握りしめながら自身のとてつもない力に歓喜していると、壁にメリ込んだまま動かなかったフレイザードが動きを見せる。

「大した力だ、いいぜ認めてやるオメェは強い！　だが、だとしてもお前が俺様に勝つことは不可能だ。この俺様の肉体はハドラー様によって核（コア）を中心に凍った岩石と高熱の岩石が合わさって出来ている。いくらこの肉体を傷つけようと、俺様の本体である核（コア）を見つけ出す手段を持たない貴様ではこの勝負、勝ち目はねぇぜ！」

クハハハハハ!!!　と高笑いするフレイザードに俺は余裕を浮かべながらポキポキと拳を鳴らす。

「言いたいことはそれだけですかフレイザード兄さん？　確かに俺は目覚めたばかりでロクな技も持ち合わせてはいない。が！　それ故に、俺はまだまだ強くなれる余地が

残っているということだ」

そう言ってミストバーンを観る。ただ見るのではない。その法衣の下に隠されてあるミストバーン本体を感じ取るのだ。

奴は肉体を持たぬ暗黒闘気の塊のようなモンスターだ。そんな奴の力を感じ取れれば……。

ゾクリ！

背筋に氷柱を刺されたのかと錯覚するほどの負のエネルギーを感じた。これが暗黒闘気の力か!?

この魔族の肉体ゆえか、負のエネルギーを拒否するどころか歓喜する自分が存在する。

そして、恐らく俺はこの力を既に使うことができる。そういった確信が確かにあるのだ。

特別なことは何一つ必要ない。ただ敵を殺す覚悟を決めること。それこそが暗黒闘気の基本にして原点ともいえるだろう。

俺は目の前のフレイザードに対して、先程までの敵意ではなく殺意を持って相手することにした。

「「「「っっっっ!!!!」」」」

俺の雰囲気が急変したことに驚いたのか、ミストバーン以外の全員が驚きの声を上げる。

そんな彼らの驚きを無視して、俺は暗黒闘気を練り上げる。

「はあああああ!!!」

すると、体から闇のオーラが溢れ出る。全身からスーパーサイヤ人みたいに黒色の気が炎のように纏わりつく。

目の前の敵を殺せという衝動に襲われるが、何故か俺はそれを完璧に制御することができている。

確かにイラつきは起こるが、だからといって衝動的に殺そうとはならない。深く息を吸って吐くことで理性的な判断ができる。

「テメェ……。まさか、ミストバーンを一目見ただけで暗黒闘気を使えるようになるとは驚いたが、それの使い道を知らないテメェには宝の持ち腐れだぜ！」

俺が暗黒闘気を使ったことに驚いたフレイザードだったが、奴が言うように、俺はこの暗黒闘気の使い方は分からない。

漫画でヒュンケルやミストバーンが使う闘魔傀儡掌なんかもやれる気はしない。

だが、だからといってこの俺をなめてもらっては困る。これでも、クラスメイトからは漫画やアニメばっかのオタクなどと言われた男だ。

例え闘魔傀儡掌が使えなくても、簡単な技ならば使うことができる。
そう例えば……
「お前はこの俺様を完全に倒すことは不可能！　だが、それに対して俺様の攻撃が当たらなくとも、当たりさえすれば消耗していくお前は負ける以外の道はのきょされ……!!!」
油断か慢心かは知らないが、長々と演説をかましているフレイザードの炎と氷の境目を綺麗に真っ二つに切り裂いてやった。
お陰で、フレイザードの最後の言葉が聞き取りにくくなってしまったが……、まあ、問題なかろう。
どうせ、くだらないことしか喋ろうとしなかっただろうしな。
「ふふふ、いい切れ味だ。さしずめ暗黒の刃（ダークブレイド）とでも名付けようか」
暗黒闘気を手に集中させ、刃のように形成させただの手刀だが、想像以上の切れ味で難なくフレイザードを一刀両断できた。
（これならば、当面は武器を手に入れる必要性がないな）
六大軍団長は真っ二つに切り裂かれたフレイザードに驚いているが、当のフレイザードを切り裂いたイレイザーは全く別のことを考えていた。
「くっ、クッソォォォ!!!　殺してやる殺してやるぞ！　イレイザー!!!!」

真っ二つになった体が逆再生するかのように元に戻っていったフレイザードは、先程までとは比べ物にならないくらいの殺意でこちらを睨んでくる。
「おやおや、フレイザード兄さん？　どうしてそこまで怒っているんだ？　これはただの実力を証明する為だけのテストのようなものだろう」
「その通りだフレイザード！　もう既にイレイザーの実力は見せた。これ以上はこの魔軍司令ハドラーが許さんぞ！」
「ふざけんな！　ここまでバカにされて黙ってられっか!!!　こうなりゃ俺様の最後の必殺技で殺さねぇと腹の虫がおさまらねぇ!!!」
もう既に生みの親であるハドラーの命令さえ聞かぬほどに頭にきたフレイザードは最後の切り札をきろうとしていた。
「もう後悔しても遅いぞ！　弾岩爆花散」
自分の体をバラバラの岩石と変えたフレイザードが狙いも何もない全方位に攻撃を放つ。
「くひゃひゃひゃ！　テメェがいくら避けようとも、この攻撃だけは避けれまい！」
確かにこれほどの細かい岩石の数を避けるのは不可能だが、それならば避けなければいいだけの話だ。
「はあああ！　全部撃ち落とす！」

自身の拳に暗黒闘気を集中させ、目の前に迫りくる岩石のみを叩き落とす。ドラクエの特技で爆裂拳があるが、もしかすると俺って今それを使えてる？

「グオオオオ！　フレイザードめ、俺たちまで巻き込みよって」

「ちっ、厄介な技だ！　だが、それを全て拳のみで叩き落すとは、やるなイレイザー」

「ひょえええぇぇ！　あのバカもんが!?　殺るのは構わんが、儂を巻き込むな!!!」

「……」

「ふん、くだらん技だ。だがそれにしてもあのイレイザーとかいう魔族……、なかなかの強さだ」

フレイザードの攻撃に巻き込まれた他の六大軍団長たち。自慢の肉体で耐えるクロコダインに、持ち前の剣技で迫りくる岩石を斬り落とすヒュンケルや、悪態をつきながら柱などに走って身を隠すザボエラや、その場を動かずに静観しているミストバーンや、同じく何のダメージも喰らっていないバランがイレイザーの評価を上げている。

「はあはあ、ちくしょうが!?　これでもダメか、この化け物め!!」

「この状況でそれは嬉しい褒め言葉だな。ありがたく化け物の称号をいただくとしよう」

飛び散った岩石が再びフレイザードの元に集まるなか、イレイザーの強さに悪態をつくも、それをヒラリとかわされ褒め言葉だと皮肉を返される。

もはや、怒りの感情のみで理性が吹っ飛んだフレイザードは、効かなかった技をもう一度放つつもりだ。

「クソガァ！　もう一度喰らいやがれ！　弾岩爆「もうよせフレイザードよ」」

フレイザードが技を放つ寸前に、ハドラーなんかとは違う圧倒的なカリスマ性の声がその場を支配した。

「なっ!?　このお声は、大魔王バーン様!?」

ハドラーの声ですら止まらなかったフレイザードが、バーン様の声を聞いた瞬間に動きを止めた。

それと同時に、姿を見せないシルエットだけのバーン様に近寄ったのはハドラーだった。

「これはバーン様！　申し訳ありません。御身にこのような羞恥を見せるとは!?」

すぐさまハドラーが深々と頭を下げてバーン様に謝罪の言葉を並べる。

「よい。此度の戦いは中々に我を楽しませてくれた。故に、今回の私闘は不問にするとしよう」

「はっ、大魔王バーン様の寛大なお心遣いに感謝致します」

深く下げていた頭をさらに下げ、感謝の意を告げる。

「さて、フレイザードとイレイザーよ。此度の闘争は中々に楽しめた。我を楽しませた

褒美として、それぞれ望むモノを言うがよい」
「ならば、俺は我が氷炎軍団の更なる戦力アップを願います」
「ふむ、いいだろう。魔界から呼び寄せた精鋭をそなたの軍に派遣するとしよう」
　フレイザードの軍の強化にミストバーンとバランを除く他の3人の軍団長が苦い顔をする。
（ちっ、フレイザードの奴めここで俺たちと差をつけるつもりか!?）
（ふん、いくら戦力を強化しようとも俺の剣で叩き斬ってやる）
（おのれ！　こうなることが分かっておれば儂が戦っていたものを！　フレイザードめ！）
「ケケケケッ！　どうした？　そんな敵でも見るような目をしてよ！」
　憎々しげにフレイザードを見る3人の軍団長の視線を浴びて、先の戦いで打ちのめされたフレイザードの自尊心が多少なりとも回復した。
　だが、この隣に立つ弟にあたるこの男が何を願うのか、それによって今の俺様の機嫌も大きく変わるだろう。
「さて、イレイザーよ。お主は何を望む？　六大軍団長の座を望むというのであれば、すまぬが既に我に忠誠を誓う忠臣にその席を渡している。どうしても欲しいというのであれば、六大軍団長の座を賭けた決闘の場を用意するが、どうするかな？」

「「「「っっっっ!!!!」」」」

大魔王の言葉に六大軍団長の全員が目を見開く、先の戦いを見て既にイレイザーが自身よりも劣る存在でないことはこの場の全員が理解している。

バランやミストバーンは負けるとは思っておらず、ヒュンケルやクロコダインは来るならばコイ！　と意気込んでいる。

だが、ザボエラは両手を合わせて指名するな！　と念を押している。

「おい！　指名するのなら俺様を指名しな！」

イレイザーが誰を指名するかを待っているなか、先程イレイザーと闘ったばかりのフレイザードが自らを指名しろと立ち上がる。

「へえ、まさかフレイザード兄さんから直々の御指名を受けるとは思ってもいなかったよ。けど、悪いけど俺は誰も指名する気はないよ」

「なに？」

俺の発言に驚きの声を上げるフレイザードを無視して、バーン様に片膝をついて自らの考えを話す。

「バーン様。先程俺とフレイザードとの戦いを見ておられたのであれば、俺に足りないものが存在することにお気づきかとございますが……」

「ふむ、確かに貴様は強かった。だが、それはあくまでも肉体の強さであって、貴様のみ

の強さともいえる技が見えなかった。最後に見せたのはあくまでミストバーンの暗黒闘気の猿真似でしかない」

「お察しの通り、俺には敵を殺しきる必殺技（フィニッシュホールド）がありません。それに、軍を率いるにしても戦闘経験というものがあまりにも足りていない。そこで、バーン様にお願いしたき義がございます」

「なんだ？　何なりと言うてみよ。お主にはそれを願う権利がある」

「それでは、私に強くなるための時間をくださいませんか？　およそ一ヶ月もあれば充分です」

「ほう、一ヶ月と申したか……」

バーン様の声にも不満そうな感情は見えず、中々に絶妙な期間だと己でも思っているとフレイザードが怒りの声を上げる。

「テメェ!?　一ヶ月も修業をするってのか？　そんなに時間をかけてりゃ俺達が地上侵略を済ませっちまうぜ！」

「へぇ～、ふ～む？」

一ヶ月もあれば地上を侵略できると大言壮語なことを語るフレイザードを横目に、この場にいる六大軍団長をちらりと見ると、ほんの少しの溜息をついてやれやれといったポーズを示す。

「確かに、兄さんは核(コア)を破壊しなければ倒せない。バランさんやミストバーン殿は単純に実力が高いゆえに倒せない。だけど、他の3人はどうかな?」

「「なにっ!?」」

イレイザーの言葉に反応したヒュンケル、クロコダイン、ザボエラは怒気を宿した目でこっちを睨み付けるが、まるで恐ろしくない。精々が野良犬が威嚇している程度の脅威でしかない。

「はっきり言って、六大軍団長の半分が足手まとい。特に、ザボエラ辺りは自ら地位を得るために足の引っ張り合いすらしかねないと思っているよ」

そう言うと、ヒュンケルとクロコダインが前に出た。

「そこまで言うのならば、まずは貴様で俺たちの強さを確認してみるか?」

「武人として、ここまでコケにされて黙っているわけにはいかんぞ!!」

剣と拳をこちらに向けて勝負を仕掛けてこようとするが、イレイザーはそれを前に出した手でやめさせる。

「やめておけ、先程も俺と兄さんの戦いでこの場をずいぶんと荒らしてしまった。これ以上はバーン様とハドラー様をご不快にするだけと知れ!」

「「ぐっ!」」

いかに侮辱されて頭に来ていたとはいえ、己の上司であるハドラーとバーン様を引き

合いに出されれば引き下がらざるを得ない。
「ちなみに、後ろでコソコソと呪文で俺を狙い撃ちするつもりだったのだろうが、あいにくとその程度の呪文じゃ鼻歌まじりで躱せるぞザボエラ」
「ぬぐっ!?　き、気づいておったのか」
　ヒュンケルとクロコダインが前に出ている間に、コッソリとイレイザーの後ろの柱から呪文による攻撃を加えようとしていたザボエラだったが、俺はその程度の不意打ちなど引っ掛かるようなマヌケではない。
　2人が前に出てきた際に、コッソリと後ろに回っていたのは最初から見えていたからな。
「ふふふ、もうよいだろうお前たち。それで、イレイザーよ。貴様の修業の期間は一ヶ月でよいのだな?」
「はい。それと付け加えることが許されるのならば、ぜひとも強者が蔓延るような場所を修業の場にしたのですが?」
「ならば魔界がよかろう。今や冥竜王ヴェルザーは石像となっており、儂は地上侵略の為に留守にしている状態だ。空の玉座を巡って戦争も起きているだろう。ついでといってはなんだが、貴様に魔界の統一を任せたい。引き受けてくれるな?」
「はっ、その程度の願いでしたらこのイレイザー。御身の望む成果をお約束いたします」

修業のついでに魔界の統一というかなりの無理難題に近いものを任されたが、ラスボスともいえるバーン様や冥竜王ヴェルザーがいないのであれば、そう難しいものではないとは考えている。

実際に、魔界の半分を支配していた冥竜王ヴェルザーを討ったバランを間近で見たが、今の自分では決して敵わないという感想と同時に、いずれは手が届く領域に立っているというものだ。

半月でバランに迫る実力者になり、残る半月で魔界の統一と同時にそこいらで暴れるモンスターとそれを束ねるボスモンスターを倒していき経験値を増やしていく。

それが今の俺が強くなるための頭の中で考えている道筋だ。

やがて、バーン様が地上侵略計画をお話しされ、それぞれがどの国を攻め落とすかの話し合いが終わるとバーン様は何処かへ消えていった。恐らくはバーンパレスに戻ったのだろう。

「さて、バーン様も席を立ったことだし、俺も魔界へ向かわせてもらう」

「へっ！　テメェが帰ってくる頃には地上は俺様の手で全て征服さておいてやるぜ！」

「ふふふ、それは頼もしいな。では、ヒュンケル君、クロコダイン殿、ザボエラの3人は人間たちに返り討ちに会わないように頑張ってくれよ」

最後まで舐めた態度で出ていったイレイザーをヒュンケルとクロコダインとザボエ

ラは苦虫を噛み潰したような顔で睨んでいた。
「ケケケケッ、かなりの言われようだったな」
そんな3人に追い打ちをかけるようにフレイザードが笑い声をあげてバカにする。
「ふん、勝手に言っていろ。俺はすぐさまパプニカを堕としてみせる」
「俺もだ。ロモス王国を我が百獣魔団ですぐに滅ぼして目にモノを見せてやる」
「キィ～ヒッヒッヒ、ワシの妖魔士団も忘れてもらっては困る。あの若造の節穴っぷりを思い知らせてくれようぞ！」
（（いや、お前だけは正当な評価だと思うがな？））

★

カツカツと誰もいない廊下を1人歩きながらイレイザーは鬼岩城内を歩いていた。
それにしても、魔界か……。原作ではまるで描かれていなかった。設定だけではあるが、ドラクエシリーズでは魔界はラストダンジョンにあたるステージだ。レベルは４０ほどが適切だった筈だが、今の俺のレベルはいくつぐらいだ？
色々と考えながら歩いていると、目的の部屋の前に辿り着いた。

「入るぞ」

部屋の中にいる者の返事も聞かずに無遠慮にドアを開けて中に入る。

「待っておりました。イレイザー様」

部屋の中にはあくまのカガミと呼ばれるモンスターが鎮座していた。

こいつこそが、俺を魔界に案内する役目をバーン様から頂いたモンスターで、ドラゴンクエストジョーカーでは主人公をワープさせる役割を持つキャラとして登場していた。

「それではこれより魔界へワープさせてもらいます。準備はよろしいですか?」

「ああ、大丈夫だ問題ない」

問題ありありの死亡フラグを建設したまま、強者が蠢く魔界へ足を踏み入れるのだった。

魔界侵略作戦決行中！

魔界は死の世界と例えられる程に荒廃した場所だった。空は地上で蓋されて闇で覆われており、大地には溶岩が流れている。

そこかしこには凶悪なモンスターが歩いており、ただの人間ならば1日とて生きてはいけまい。

そんな地獄とも言える場所を現在支配しているのは4つの勢力。

1つは冥竜王ヴェルザーの支配下にあった軍で、今現在の頭はヴェルザー一族のガンドーラというドラゴンのようだ。

2つ目はバーン様に敵対している魔族の軍団で、どうやら俺の体となっている魔族が所属していた集団のようだ。

こちらに関しては、誰がリーダーかは分からなかったが、全体の平均レベルは35を超えるかどうかの強さだった。

3つ目はヴェルザーとバーン様のどちらにも組みしなかった残り物の集まりだ。ハッキリ言ってただの烏合の衆程度の認識で構わないだろう。

4つ目は他の3つの勢力と違って、軍ではなくたった一人で勢力扱いとなるほどの実

力を持つ魔人と呼ばれる種族のモンスターらしく、名をカイオウと名乗っているようだ。

この4つの勢力は均衡を保っているというよりも、カイオウから逃げながら互いを牽制しているといった状況だ。

もし、カイオウを叩き潰せば他の3つの勢力が漁夫の利を狙って、新たな脅威に連合となって襲い掛かってくることが予想される。

ひとまずは、カイオウ以外の3つの勢力を削りつつも、自身の勢力を伸ばしていくのが先決だろう。

そうした方針でこの魔界に来てから1週間と数日が過ぎた。

今の俺の勢力は生みの親であるハドラーから受け継いだキラーマシンの量産とそれの改良によってできたキラーマシン2とキラーマシンガーの2つを束ねるブレイン的立ち位置のスーパーキラーマシンを頂点にしたマシン軍団だ。

この軍団は非常に有能だ。恐れもなければ恐怖もない。チェスのように簡単に捨て駒にできるし、疲労もない分壊れるまで働かせることができる。

まあ、もっとも命令されたこと以外は何もできないし、状況に応じて臨機応変に行動する等といった優秀さは持ち合わせていないがな。

「ギィギィ、イレイザー様。2日前に出発したキラーマシンガー部隊が戻りました。戦

果はガンドーラの配下の部隊1つとバーン様に歯向かう愚かな魔族の集団の一部の討伐に成功しました。こちらの受けた被害はキラーマシンガー部隊の3割が大破され、残り5割が中破し、残った2割のみが無傷です」

「ほう、勢力の2つを相手どった割に損害は予想よりも遥かに軽微だな。これはキラーマシンガー部隊が優秀だからか？　それとも、相手が予想以上に弱かったのか？

いずれにしても、これで奴らも俺たちの存在に気が付くだろう。謎の新たな勢力か、はたまた、別の勢力の増援なのか……、どちらの考えをするかによって奴らの対処の仕方も変わってくるだろう」

後者の考えならば互いの勢力争いが激化してこっちはやりやすくなるのだが、前者なら万が一にも手を組まれるなどといった事態も考えられる。

「まあ、どちらにせよ最終的に勝つのは俺だ。どっちに転ぼうとも問題はない」

自信満々に独り言を呟く俺は報告が来るまでの暇潰しと経験値稼ぎ（修業）によって出来た足元に転がる無数のモンスターの死骸を踏みつけながら、戦果を挙げたキラーマシンガー部隊の様子を見に行くことにする。

「成程、確かに報告通り8割程度しかやられていないな。それもやられた大半が修復可能クラスの損傷か……。炎や氷による跡はガンドーラ部隊のブレス攻撃によるものか。

そして、こっちの剣と矢による傷は魔族によるものだな……」

破損した部分を触れながら、何で出来た傷かをつぶさに観察する。それと同時に、自身の魔力によって回復させていき、大破してここにいないのは新たに作り出す。

およそ自身の魔力の3割程度で部隊の完全回復が完了する。

「さて、これで戦力は完全に元に戻った。お前たちは引き続き他の勢力の牽制と間引きを行え」

『了解しました』

直っても命令されたらすぐに行動しなくてはならない。これも悲しきロボット兵のありようかな……。

っと、自分で作り出した状況で感傷に浸っている場合じゃないな。俺の予想だとそろそろ――

「きたか……」

「貴様があの忌まわしき機械兵共の親玉か……」

やってきたのは種族がバラバラなモンスターの群れだ。つまり烏合の衆の群れだ。

まあこいつらがくることは予想できていた。敵対勢力の2つが謎の集団によって深手を負わされた。

それも、自分たちが襲われた相手にだ。そうなれば手負いとなった部隊に奇襲を仕掛

けるのは当然のこと。
そして、その過程で黒幕の元に辿り着けるとなれば黙って俺のところまでストーカーするのも当たり前だ。
奴らはまんまと俺の正体を突き止めた思ったようだが、実際は俺の掌の上でまんまと踊らされているとは考えてもいないのだろうな。
「ああそうだ。俺がお前たちが探している黒幕で間違いない」
ザワリ！　と俺の言葉は波のように広がり、モンスターたちはざわめきだした。
きっと奴らの頭の中では俺は卑怯な臆病者で、自分たちが現れて慌てふためき様を想像していたのだろうな。
とはいえ、流石は乱世のような魔界に住まうモンスターたちだ。
そのざわめきはすぐさま落ち着き、各々の武器を握りしめる。
「ふん、貴様のような裏でコソコソする奴はてっきり貧弱そうな奴だと思っていたが……」
ジロジロと不躾に見てくるモンスターだが、その顔には恐れが見え隠れする。
流石はこの魔界で未だに生き残っているモンスターだな。一目で俺との実力差を感じ取った様だ。
今俺のレベルは５０を超えている。それに対して目の前のモンスターたちは平均３

０かそこいらの雑魚モンスターだ。

レベル１０の差はこの世界でも絶望的なひらきだ。普通に戦えば数で押しても通用しない程の敵を前にしてもはや逃げることもできないモンスターたちは玉砕覚悟の顔つきで迫ってくる。

「力の差に絶望してもなお向かってくるのは勇気かそれとも諦めか……。いずれにしても、策なく俺に向かってくれば待つのは死のみだぞ」

「「「うおおおおおぉぉぉぉ」」」

雄叫びを挙げながらも全員の胸中にあるのは勇気ではなく絶望だ。

そして、それが正しいと言わんばかりに一人また一人目の前の男に沈められていく。

斬られ殴られ蹴られ呪文で吹き飛ばされる。たくさんいた仲間が次々に倒れ伏す光景は恐怖以外のなにものでもなかった。

「ヒ、ヒィィィ!!!」

そしてついにはその凶刃が最後の一匹となったモンスターに迫る直前に邪魔が入った。

「……っ!?」

俺が気分よく北斗無双して最後のとどめを刺そうとした瞬間、突如空からメラゾーマが俺目掛けて飛んできた。

流石にそれを喰らってまでとどめを刺そうという気にはなれず、その場から離れる。
「た、助かった……?」
「何者だ?」
空にいる者を睨めつけ、その身に纏った暗黒闘気をさらに高めていく。
それは空間が闇に汚染されたのではないかと錯覚するほどの濃密さだ。これが魔界で修行し鍛え上げたイレイザーの強さ。
もはや、つい1週間前とでは比較にならない強さだ。
「我の名はクリフォード。五芒星(ペンタグラム)を支える最強の五柱の1人だ!」
そう名乗ってきた白髪のヴァンパイアらしきクリフォードと名乗る男。
五芒星(ペンタグラム)とは恐らく俺がずっと烏合の衆の群れと呼称していた連合の呼び名だろう。
(初めて知った)
先程まで無双してきた雑魚とは明らかに違うその風貌に警戒の色を示すが、俺の見立てではレベルは50に届くかどうか。
俺の敵にはなるだろうが、強敵かと言われれば悩むところだ。
この1週間戦い続けて分かったのだが、ゲームでいうところの会心いやモンスターなら痛恨か……。その痛恨や回避(ミス)などといったものは才能に左右される。
そして、俺の才能はずば抜けており、先程の無双もほぼ全ての攻撃は痛恨の一撃と

なっており、敵の攻撃も全て回避《ミス》している。
　そんな俺の感だが、このクリフォードは強さは俺と並ぶかもしれないが、才能という点においては俺が遥か格上という自信がある。
　だからこそ、敵という一応の戦えるレベルではあるが、強敵で死闘を演じるということはないだろう。
「ここ最近派手に暴れている無礼者がいるという報告を聞いたが、どうやらお前がその無礼者のようだな」
「ああその通り、とはいえ、正確には俺の部下が暴れたというのが正しいかな？」
「どっちでもいい。お前が俺の配下の兵共を殺した。それだけで貴様を殺す理由としては充分だ」
「それは怖いな。なら、俺としては殺されないように必死で抵抗させてもらおうか」
　互いに口にすべき事は全てしたと言わんばかりに口を閉じる。
　そして訪れる静寂の中、殺気と闘気の入り混じった空間に耐えられず、先程助かったモンスターが歯をガタガタと鳴らし、ついに耐え切れず悲鳴をあげたのがスタートの合図だった。
「うわあああああああ!!!!」
「いくぞ！死ね!!」

「それはこちらの台詞だ!!」
　滑空して迫るクリフォードを迎撃するため俺は地面を粉砕する威力で飛び上がる。
両者が空中でぶつかることで辺りに轟音が鳴り響く。
「うひゃあああ!!??」
　両者の激突で生まれた衝撃波を浴びて吹き飛びながら悲鳴をあげるモンスターを無視して、空中で始まる激戦は尚も激しくなっていく。
「イオラ!」
「ベギラマ!」
　クリフォードの爆発に加えてイレイザーの業火が巻き起こり、ただでさえ熱い魔界の空気が更に熱くなる。
　だがそんなこと関係ないと言わんばかりに、2人はさらに強力な呪文を連発していく。
「イオナズン!メラゾーマ!」
「ベギラゴン!マヒャド!」
　繰り出しては相殺され、MPが目減りしていく中で徐々にだがイレイザーの呪文がクリフォードの呪文を上回っていく。
「ぐっ!?何故だ!撃ち合う度に奴の呪文の威力が僅かずつだが上がっていっている」

この戦いの中で互角に戦うクリフォードに対し、イレイザーは自身の暗黒闘気を呪文に上乗せする技術を編み出した。

それが、イレイザーの呪文の威力が上がっていく理由だった。

困惑するクリフォードはそれでも呪文を撃ちだす手を止めず、なんとか隙を見つけようと飛び回るも、同じ速度で自分以上の威力がこもった呪文を使ってくる者を相手に隙などそう簡単に見つけられる筈もなく、逆に呪文の威力に押し返されたクリフォードの目の前にイレイザーが拳を構えて現れる。

「最初の一撃はいただくぞ！」

「っ!!」

遂には距離を詰められてしまい、イレイザーの攻撃を防御できたものの無様に地面に叩き落されたクリフォードは防御した腕を見て驚愕に打ち震える。

「…た…ただのルーキーではなかったのか!?これほどの力の持ち主がいるなんて聞いた覚えがない？」

防御したはずだというのに酷い傷を負った腕をぶら下げて立ち上がる。このレベルの傷となると、いくらヴァンパイアとはいえ回復に数十秒は集中しなくては治らない。

だが、そんな隙をみすみす目の前の男が見逃すとも思えない。

ほんの僅かな時間。深呼吸程度の時間でいいというのに、その時間が得られない！

「暗黒闘技『黒の手刀（ブラッックソード）』」
「うっ…、うおおぉぉぉ!!!」
ザシュッ!
「お…俺の…、俺の腕が…!?」
首を狙って放たれた手刀は傷ついた腕を犠牲に首チョンパは防げたが、代わりとして腕を失ってしまった。
多少ＭＰを消費した程度のイレイザーと、実力で負け腕を失ってしまったクリフォード。
もはや決着は付いたと言っても過言ではないだろう。
「決着は既に決まったようなものだ。無駄な抵抗はやめて素直に死ね!」
跪いて失った腕を嘆くクリフォードの首筋に、伸ばした暗黒闘気の刃を突きつける。
あっけない決着だが、これが残酷なまでの才能の差というものだ。
「それじゃあな…」
イレイザーはクリフォードの命を絶つ死の刃を振り下ろす。
だが…!
「っと…!!」
「なっ……!?」

凄まじい疾さ(はや)を持つ何者かが首を斬られる直前のクリフォードを助け出した。
「ふう～、ギリギリセーフ！」
黒豹(パンサー)の顔の獣人型モンスターがクリフォードを抱きかかえていた。
「テメェ…、なんでここにいる？」
「ん～、なんかここら辺走ってたらクリフォードんとこの部下が助けを求めてきたからよ。来てみたらビックリ！クリフォードが殺されかけてたんだもんな!?」
あいつの部下？成程、さっき吹っ飛ばしたあのモンスターが呼んできた助っ人か。
しかも、あいつの態度からして、恐らくはクリフォードと同じ地位に立つ者。
つまり、五芒星(ペンタグラム)の1柱であることが予想できる。
別に地位が同じだから強さも同じとは思わないが、先程のスピードは不意を突かれたとはいえ、この俺が獲物を奪い取られたからな、少なくともクリフォードより弱いとは思えんな。
「何者だ貴様？」
「ん？オレか…。オレはスペンサー！クリフォードと同じ五芒星(ペンタグラム)の1柱だ」
「バカか貴様は！敵に聞かれてベラベラと自分の情報を話す奴がいるか!?」
コイツ…、あまり駆け引きとかを得意とするタイプではないな。なんというかリアルにいる陽キャの属性を持ったようなキャラだ。

んで、逆にクリフォードは駆け引きで自分に有利になるよう進める策士だな。さっきのスペンサーの五芒星（ペンタグラム）の1柱の宣言は何も考えずに言っただろうが、クリフォードの場合は恐らく威圧や牽制の意味合いを込めたものだろう。
「それで、ここからどうするつもりだ?」
「ん～、とりあえずクリフォードがこんな状態だし、今日はここまでってことにしない?」
「ちっ!」
舌打ちをするクリフォードだが、気に入らなくとも、それが最善だということが分かっているのだろう。
だけどな、
「それを俺が許すと思っているのか?」
「いいや、お前ってチャンスは絶対に逃さないタイプだろ。だからもう1人助けを求めた!」
「なにっ!?」
「へっ、俺様を呼んだか!!!」
頭上から高らかな声と共に、俺に向かって斧が飛んでくる。
またもや不意を突かれる形となったが、大声をあげての不意打ちなど避けてください

と言っているようなものだ。

「不意を打ちたければ、静かに行うべきだな…」

イレイザーは飛んでくる斧から避けもせず、手刀で弾き返す。弾き返された斧は襲撃してきた持ち主の手元に帰っていく。

「はっはっは！別に不意打ちをしたつもりはない。オメェさんが今のに反応出来るかどうか試しただけの事よ。だがまあ、俺様の斧が避けられるんじゃなく弾き返されるとは予想していなかったがな！」

新たに現れたのは変態と称される類のモンスター？だった。覆面を被った半裸のマッチョといういかにもお巡りさんにお世話になるタイプだな。

「スペンサー！お前は先にクリフォードを連れて逃げろ。五芒星（ペンタグラム）が3人も揃って逃げるってのは情けないが、俺様の部下の情報でカイオウがこの近くに現れたらしいからな。こんな奴とやりあっていたら間違いなく目をつけられっちまう。だからさっさと行け!!!」

「OK！ウォーカーも無事に逃げ切れよ。んじゃ、行くぞクリフォード」

「ちっ、クソがぁ！貴様今度あったらただでは済まさねぇ。覚悟しとくんだな!!!」

そう言い残すとスペンサーはクリフォードを連れて一瞬で遠くまで走り去っていった。

すぐにでも追いかけて始末したいところだが、目の前の変態がそれを許してはくれないだろう。

恐らくだが、この変態は単純な肉体の戦闘力でいえばクリフォードとスペンサーの2人を凌ぐ強さを持つと俺は睨んでいる。ここで1人となったコイツを始末出来るチャンスが来たと喜ぶべきなのだろう。

だが、それでも俺はクリフォードが3人の中で一番厄介な存在になると考えている。あいつの恐ろしさはあいつ自身の強さではなく、リーダーとしての策士の才能や仲間を指揮する強さだと考えている。

さっきのあいつは俺に負けて頭に血が上ってしまったから、冷静な判断ができずに仲間に指示を出すことはしなかった。

だが、一度傷を癒し、再び俺の前に現れた時には、確実に俺を仕留める兵と準備をして立ちふさがるだろう。

だからこそ――

「そこをどけ。そうすれば貴様を見逃してやる」

「それは無理な相談だな。そうすればお前は約束を守るだろうが、代わりに俺様の仲間を殺しに行く。それだけは絶対に阻止させてもらうぜ!」

手に持った斧を構えて仁王立ちのポーズで立ちふさがる。ただそれだけのことなの

に、巨大な鉄壁の壁が立ちふさがったかのようだ。
「どうやら、楽に通ることはできそうにないな」
腰を落として突撃の態勢を作る。この勝負はさっきのクリフォードよりも楽に勝つことはできそうにないな。
だが、負ける気はこれっぽちもない。
暗黒闘気を最大まで高め、身体能力向上に加え、先程消費した魔法力を回復させていく。
相手にとって今の俺は力を溜めている最中で攻撃を仕掛ける絶好のチャンスだというのに、一切その場から動こうともしない。
厄介だな、見た目はふざけているのに、目先のチャンスに飛びつかずに足止めの役割を忠実に守ってやがる。
とはいえ、
「時間もない。さっさと倒させてもらうぞ」
「出来るものならやってみろ」
解放した暗黒闘気をオーラにして纏い、単純なタックルをぶちかます。ただのタックルと侮るなかれ、俺の今の防御力は準オリハルコンクラスの硬度を誇る。それが、超高速でぶつかるのだ。

それがどういうことか理解できるか?つまりだ、目の前に武装した列車が突っ込んできたと例えれば分かりやすいだろう。

「ふんっ!」

ドスンッ!!!!

イレイザーとウォーカーがぶつかると同時に強烈な衝突音が鳴り響いた。それが今のタックルの威力を物語っている。

それでも、目の前のコイツは気合いで俺のタックルを受け止めた。とはいえ、無傷ではない。

受け止めるためにワザと俺のタックルを喰らったのだ。受け止めた衝撃で内蔵のいくつかは潰されただろう。その証拠に奴は口から血を吐き出した。

「ぐほっ!?!!?」

「俺のタックルを受け止めるとは大したものだ…。だが、その代償は少々高くついたみたいだな」

イレイザーはウォーカーを逃がさまいと、逆にウォーカーの腰に手を回し、そのままの態勢で飛び上がり、ジャーマンスープレックスを決める。

「なんの!?」

ウォーカーは頭が地面に叩き落されるよりも先に両手で着地を成功させ技の威力を

無効化させる。

技が完璧に防がれたイレイザーは反撃を喰らう前にウォーカーを掴んでいた手を放して真正面に立つ。

「やるな…」

「流石に俺様も五芒星（ペンタグラム）の1柱だからな。そう簡単にくたばっちまう訳にはいかんからな」

そこから互いに距離をとり、再び様子見に入る。今のは正直決まったと思うくらいの会心の流れだったはずなんだが、やはりそう簡単に決着はつかないか。

とはいえ、こっちのダメージは0に対して相手は確実に深手を負った。

そう考えて余裕を持ったのがイレイザーのミスだった。

「ベホマ」

ウォーカーは腹に手を当てて回復呪文であるベホマである使用した。まさか、あの見た目で回復呪文を覚えているとは思わず、そのまま見逃す形で使わせてしまった。

冷静な判断力に、高いステータスに加えて回復呪文による自己回復か…。まさにタンク職の理想の構成だな。

一撃で決着をつけるつもりだったが、見通しが甘かったな。

もう既に逃げ切るに十分な時間を稼がれてしまった。今から追いかけても逃げたあ

いつらを見つけ出すのは正直不可能だろう。
　なら、もう片手間で相手をするのはやめにしよう。
「優先順位の変更だ。既にクリフォードは追跡不能の距離まで逃走されただろう。なら、今の俺の最優先事項は貴様を殺すことだ」
「へっ、それは怖いな…。でも俺もスペンサーから無事に逃げ切れよって言われてるからな。悪いがテメェに殺されるわけにはいかねぇな!」
　気迫は充分。死ぬ気はないと……。別にナメられてるとは思わないが、……やはり不快だな。
　これもまた魔族として転生した影響か、ハドラーによって生み出された影響かは知れないが、前世とはまるで違う性格になっているな。
　今の俺は誰が相手であれ、勝てるもしくは負けないといった感情を持たれると、酷く不愉快な気持ちになる。
　完全に悪役ボスの性格だな。まあ、別にそれが嫌いというわけでもない。これが今の俺なのだから甘んじて受け入れるだけだ。
「いくぞ!!」
「こい!!」
　再び激戦が始まる。スピードと一撃離脱によるイレイザーの攻撃に対し、ウォーカー

はその場で動きを止め、確実に致命傷となる攻撃のみを防ぎ、それ以外の攻撃にはダメージ覚悟のカウンターで攻撃を刻んでいく。

ダメージ量ならばウォーカーの方がデカいが、スタミナの消費量はイレイザーの方が多い。

もはや時間に気をまわす必要のなくなったイレイザーは縦横無尽に攻撃を繰り返す。少しずつ、されど確実にウォーカーを死に近づけていく。とはいえ、ウォーカーもただ黙ってやられているわけもなく、出来た傷を無視しながら痛みを感じた瞬間に反射で攻撃を繰り出す。

戦況は膠着状態といって然るべき状況だが、この戦いの決着の刻(とき)はすぐそこまで迫っている。

「ハァハァ、まさかここまで手こずるとは想像だにしていなかった。所詮は残り物共である烏合の衆の群れのまとめ役程度だと思っていたが、存外に楽しめたぞ」

「グゥ……、そいつは結構な評価で嬉しいぜ」

致命傷を防いでいるとはいえ、既にその全身は傷だらけで特に黒の手刀(ブラックソード)による刺突によってできた風穴が酷い。

最初のベホマを合わせてこの戦いでもう１０回以上の完全回復呪文を唱えてしまったウォーカーはもはやホイミをかけるＭＰすら残っていなかった。

「本当に厄介だったよお前は、もし五芒星（ペンタグラム）の全員……いや、下手すれば先程逃げた2人が一緒になって戦っていたらこちらも痛手は免れなかっただろう」

これは勝者として敗者に送る最大限の称賛であった。そう、既に決着はついている。

それはウォーカーにつけられた傷にあった。暗黒闘気によって強化された拳による攻撃はまだしも、暗黒闘気によって直接作られた黒の手刀（ブラックソード）によって出来た傷は回復呪文では癒すことができない。

それが今回の勝負の明暗を分けたのだ。ほんの少しのかすり傷程度のイレイザーと、満身創痍のウォーカーの2人を見てどちらが勝者と敗者などか誰の目から見ても明かだというのに、それでもまだウォーカーは諦めてはいなかった。

「まだだ……、俺達には責任ってのがあるんだ。この過酷な環境である魔界の統一。それを成すことが群れの長――五芒星（ペンタグラム）を支える5柱の役目なんだよ!!!」

ウオオオォォォ!!!っと最後の力を振り絞って立ち上がるウォーカー。

その目には確か意思が宿っており、決して折れはしない決意が満ちていた。

もしも、今ここに立っている俺が前世の俺ならば、その行為に尊敬と憧れ、そして敬意を示したであろう。

だけども、

「カッコイイけど、ウザイよ」

「――がっ!!!」

立ち上がったウォーカーの腹に蹴りを打ち込む。体がくの字に曲がったウォーカーは血を吐きながら吹き飛ばされ、遠くに見える岩山へと叩きつけられる。

その主人公らしい行動に何故か虫唾が走り、悪意による攻撃でウォーカーは死に体となった。

「なんでだろうな?その心意気に素直にカッコイイとは評価できるんだけど、俺の心が鬱陶しいって騒ぐんだよ。やっぱし、もう俺は根っからの魔王軍の一員ということなのかもな」

誰に話すわけでもなく、確認するように独り言を呟くイレイザーは、最後の止めを刺そうとして岩山に叩きつけられ動けないウォーカーにメラゾーマを打ち込もうとした。

その時――

ドドドゴーン!!!

遠くの方から破壊音が聞こえてきた。その音が聞こえてきた方角には確か復活させたキラーマシン部隊を送り込んだはずだ。

まさかと思いキラーマシンの反応を感知してみたが、一切の反応が返ってこなかった。これは全滅させられたと思っていいだろう。

だが、キラーマシンならともかくキラーマジンガを含めた機体が一瞬で破壊する者な

どこの魔界には――!?
「まさか、カイオウか!?」
　そういえば、ウォーカーの奴もカイオウがこの近くに現れたと言っていたな。クソッ!こんなタイミングでフラグを回収するか。
　とはいえ、まだカイオウとは距離がある。あの一瞬で俺のキラーマシン部隊を全滅させるということは今の俺では負ける可能性が高い。悔しいがここは見つかる前に撤退しなければならないだろう。
「だが、その前に貴様は確実に殺すぞウォーカー!!!」
　右手に発動しっぱなしだったメラゾーマを今度こそウォーカー目掛けて投げつけた。
「おっと、そうはさせるか!」
「なにっ!!?」
　再びイレイザーの攻撃が直撃する寸前に、横から飛び出したスペンサーがメラゾーマを天へと弾き飛ばし、空中で行き場をなくしたメラゾーマが暴発し花火のようにはじけ飛んだ。
「さて、まさかウォーカーまでやられるなんてビックリだけど、今のでカイオウもこっちに獲物がいるってバレちゃっただろうし、ここは痛み分けってことでヨロシク!」
「――っ待て!」

言うが早いかスペンサーは意識を失ったウォーカーを背負って再びその自慢のスピードで戦場から遠ざかってゆく。すぐさま後を追って殺しにかかりたいが、カイオウがいると思われる方角から猛スピードでこっちに近づいてくる巨大な力を感じる。

このままスペンサーを追いかけてもいいが、もし行く手を妨害するトラップでも仕掛けられていれば、後ろから迫ってくるカイオウと対面してしまう恐れがある。

「ちっ、今日のところは貴様の言う通り痛み分けにしておいてやる。だが、次に会った時は必ず殺してやる！覚悟しておけ!!!」

遠ざかってゆくスペンサーの背中に向かって殺意の乗った怒りの言葉を吐き捨ててイレイザーはその場から逃げ去っていった。